

〔書評〕

## 中国が読める中国現代小説①

池野重男

## 1. 広がるナショナリズムのなかで

「コレクション中国同時代小説」（全10巻 勉誠出版）というのがある。いま私が手にしているのは第5巻・劉慶邦『神木——ある炭鉱のできごと』（渡辺新一・立松昇一訳 2012年）であるが、最後の2ページに次のようなシリーズ紹介がある——

現代を代表する作家たちが描く、中国の真の姿。ニュースや歴史だけでは知りえない「思い」は、文学によって伝えられる——

〔編者のことば〕政治・経済の分野では互いに重要なパートナーとなった中国と日本ですが、一般の日本人の中国に対する関心はむしろ低下しているのではないのでしょうか？ 個々人の生活レベルに目が向かないため、一律に中国に対して不信感を抱いてしまう傾向が見られます。そんなとき文学作品は、隣国の人々の生活や思いを知るための有効な手段となるはずで。一人でも多くの読者に、この小説コレクションを届けたいと思います。（編者代表 飯塚容） [強調傍点は池野]

ここに示されている危惧を、私も共有する。もともと私が本書を手にしたのは、日本の政治情況のなかでの若い学生たちの常識的言動、つまり、時代の流れというものへの徹底的な寄りかかりをどう読み、どう働きかけるかを模索していたことにある（「学生たちの歴史認識を読む」本誌第65巻第5号 2015年1月）——今日の学生たちの貧困状況、それをもたらしている新自由主義、そこから生まれる自己責任論を受け入れて一層の困難に身を置いてしまう学生たち、その結果としての多忙ななかでの学習意欲の減退（コピペ問題）と他者への無関心、中国や韓国などアジアとの日本の歴史的認識を欠いたままでの時代迎合的な姿勢、そうした姿勢＝世論を背景に、さらに国を挙げての中国蔑視が図られているのが今日の政治情況である。

ところで、「若い学生たち」ばかりが時代迎合的なのではなく、多くの大人たちが安倍政権を支持していることは、「興味・関心の問題と社会のありよう」（本誌第65巻第4号 2014年11月）で紹介したが、星野智幸『未来の記憶は蘭のなかで作られる』（岩波書店 2014年）もそうした今日の日本の状況を描き、「あれほど政治や社会を熱く語ることを毛嫌いし、冷淡だった人たちが、今にしてなぜ、こうもナショナリズムに入れ込んでしまう

のか」, 「話題が例えば韓国のことと及ぶと、それまでとうってかわって……侮蔑的な口調で、嫌悪を表明する。日本に対する態度を批判しながら次第に激高し、中国についてもなじり始め、日本はもっと国防に力を入れるべきだと言ひ、特攻隊や戦没者への感謝を口にする。スポーツでの『日本人』の活躍を、涙を流さんばかりに礼賛する」という事態の背景を解明している——「ナショナリズムは、それを信奉する人に一つのアイデンティティを与えてくれる。『日本人である』というアイデンティティである。このアイデンティティの素晴らしいところは、決して傷つかないこと。日本社会の中で生きている限り、日本人だという理由でパッシングを受けることはない。そういう理由で批判をしてくるのは、近隣の外国であり、それに対しては『日本人』同士でまとまって反論することができる。だから、自分一人だけが傷つくことはない。／『自分は日本人なんだ。日本人はまじめで粘り強く頭がよく、規律正しく団結力があって、サムライ的な腹をくくれる強さがある、苦境を乗り越える力を持っている、そんな日本人の一員なのだ』。そう考えれば、自分が個人として抱えている劣等感も消え、強い存在になったかのように感じられる<sup>1)</sup>。……／自分を捨てても『もう傷つきたくない』と思うほど、この社会の人たちはいっばいっばいなのだと思う。長年の経済的な停滞と労働環境の悪化、それに伴う人間関係の破壊、いつか人生を転落するんじゃないかという恒常的な不安などがつのっていたところに、大震災と原発事故が起こった。……／限界ギリギリで持ちこたえていることに疲れきり、もう落ち着きたい、安心したい、穏やかでいたいと、安定を求める気持ちが高まる……もうこれ以上悲観的なニュースや将来像は見たくないと思身が悲鳴を上げ、現実から目をそらす。そうして無関心が広がっていく。／『日本人』信仰は、そんな瀬戸際の人たちに、安らぎをもたらしてくれるのである。安倍政権を支えているのも、安定を切望するこのメンタリティだろう。」(pp. 12~17)

国内の危機・不安を外に向けることで“解決”しようとするのは、これまでの歴史が教えるとおりの政権の常套手段だ。その結果としての今日の日本での嫌韓・嫌中、反韓国・反中国の広がりである。日中での世論調査が明らかにするような最近の異常な対中、対日感情の悪化傾向<sup>2)</sup>は、そこになんらかの操作なしにあり得ない。

さらに示せば、「基地と観光は共存できない」・「平和なくして観光は成り立たない」と語る、「沖縄経済界のリーダーのひとり」平良朝敬・かりゆしグループ会長は、「安倍首相や自民党関係者が、安全保障を考えると、まず軍事を考えますよね。しかし安全保障は軍事から入っちゃいけないのです。文化と経済なんです。文化と経済がしっかりしてい

1) 加々美光行『歴史のなかの中国文化大革命』(岩波現代文庫 2001年)は、「暴君の治下の臣民は暴君よりも暴」(「暴君の臣民」という魯迅の言葉に依りながら、「わたくしたち」の問題を説いている——「およそカリスマ的個人権威であると物神崇拝的組織権威であるとを問わず、一種の超越的権威の下に登場する『人民・大衆』は『暴』なるものである。／むろんわたくしは日本人にもこのような『暴なる民』になる可能性がないとは思わない。わたくしたちもまた『信念の危機』にあることは誰もが知っているのではないか。」(pp. 190~191)

2) 朝日新聞2014年9月10日

れば、軍事が一番最後なんです。最後の砦が軍事なのであって、僕は順番がいつも違うと思っています。／尖閣の問題については、沖縄は何も怖がっていません。中国や台湾に対する脅威って何もないんです。脅威を煽っているのは誰ですか？ これはやはり、日本政府がアメリカから煽られているんでしょうね。煽られれば煽られるほど、軍事費が伸び、軍事産業が栄えるわけですから」と冷静に分析している。そして、そんな彼だからこそ現体制から嫌がらせも受ける——「これは勘繰り過ぎかもしれませんが、国税が2回も入るっていうのもおかしいですが……。／会社も私個人にも、うちのおふくろのところにも入りました。」(広河隆一インタビュー「党派越えた『オール沖縄』——沖縄県知事選・衆議院選挙」『DAYS JAPAN』2015年2月号)

だとすれば、少なくとも近隣の外国を知ることで、そうしたありきたりな“解決”に流れない自分を準備しておくことも大事なことだろう。だから、中国における具体的な「人々の生活や思いを知るための」小説を提示することがひとつの「有効な手段となる」のではないか。それが、少なくとも私がいま現場でなしうる一つの仕事ではないか。そうした思いから、もう一冊、『じゃがいも——中国現代文学短編集』(金子わこ訳 小学館スクウェア 2007年)を選んでみた。『神木』にもいくつかの短編が収められている<sup>3)</sup>が、『じゃがいも』は短編ばかりであるから、あまり本を読まない学生たちにも取っつきやすいかもしれない。

もっとも、私自身がそれらを文学作品として読むだけの力量はない。たとえば、葉弥「ピンク色の夜」(『じゃがいも』所収)は、幼い娘と母親との物語であるが、訳者・金子わこ「訳後記」には——

離婚して一人で子供を育てる母親と娘のつながりの脆さ、教師と子供との微妙な関係、母親の女性教師に対する鋭い視線——とても女性的でデリケートなものが描かれている。一般的には可愛さや華やかさを連想させるピンク色を不安感の象徴とみたところが独創的でまた共感できる。 p. 308

あるいは、『神木』にある渡辺新一「解説」によるそれぞれの作品紹介・批評には——

「ナイフを探せ！」  
……事件を知って池の周辺に集まる人々よりも、人々のただならぬ気配を察知してメス犬を追い掛けまわしていた犬たちが、一匹のオス犬に狙いを定めて襲いかかる場面が印象的である。 pp. 423~424

3) 渡辺新一「解説」に従って正確に言えば、劉慶邦は「中篇、長篇も書くが、短篇小説をもっとも得意とし『短編王』ともいわれる。」(p. 420)そして、「劉慶邦は日常生活の中で誰もが体験する小さな出来事や、目にする小さな草花から、一つの短い物語を紡ぎ出す。短編小説は、文学作品とか書物とかと考える前に我々の生活の最もありふれた経験の一部なのだ。」(p. 422)

## 「幻影のランタン」

元宵節にランタンをかざして祝うといった昔からの行事は……視力を失った十三歳の娘を気遣って、娘の作ったランタン菓子は誰かにもっていかれたことにするために密かに隠す父親と、その父親のすべての行動を知って温めてから食べようと告げる娘の、互いに相手を傷つけまいとする言動の行き違いが、父娘のあいだの微妙な愛情のあり方を浮かび上がらせている。なにやらO・ヘンリーの短編世界を彷彿させるような、小さな、過不足のない完結した世界である。 pp. 424~425

こうした文学的で感覚的な解釈は、私には能力的に不可能である。だから、そこらあたりについては、訳者による解説などを紹介することで責を果たすことにせざるを得ない。そこで、文学的なコメントに代えて、私の経済学的な視点からの解読を試みたい<sup>4)</sup>。

## 2. 舞台は中国の農村

『神木』の訳者のひとりである、渡辺新一「解説」によれば、作者の劉慶邦<sup>リウウチンパン</sup>は一九五一年生まれで、「九歳のときに、馮玉祥<sup>フオンユンシヤン</sup>の下級軍人だった父親を亡くした。中学卒業に際して、教員と同級生から進学の推薦を受けることができず、農民となった。文化大革命期で、出自による階級区分が徹底されており、父親が馮玉祥の下級軍人であるということは、その家族全員も出身階級がよくないことを意味していた。三年後、一九七〇年に……炭鉱労働者となり、また、鉱務局宣伝部で働いた。農村と炭鉱に材を採った作品が多いのは、この時の体験が基になって」(p. 417) おり、「農村で過ごした十代の生活体験は、多感な少年に過酷な現実社会を見せつけ、また、後年旺盛な執筆活動の多くの題材を提供することになった」(p. 418) という。

だから、『神木』の舞台は農村なのである。そして、農村における「過酷な現実社会」のなかで生きる人たちの姿が描かれている。農村が「過酷」なのは、都市に比較してのことである。なぜ農村と都市とでは違うのか、そして農村のほうが「過酷」なのかは、国は違えど日本の状況を想えば想像できる。明治維新からの日本資本主義において都市の労働者の低賃金を可能にするものとしての低米価政策が必要であった——そのことは現在も変わりはない。だからこそ TPP が画策されるのである。また、低米価ということは農民の収入が少ないことであり、つまりは養うことのできる人数に限られるゆえに“過剰人口”が都市へと吐き出され、労働者の供給増加によってまた都市の労働者の賃金が引下げられる、という仕掛けである。工業化を急いだ革命後の中国においても農村を犠牲にした経済政策が進められ、都市と農村の格差が生まれた。これについては、河地重蔵編『転形期の中国経済』(世界思想社 1981年)や上原一慶編『現代中国の変革——社会主義システム

4) じつは、この方法は私にとって初めてではない。「小説のなかに経済を読む」(本誌第50巻第6号 2000年3月)、「小説のなかに労働を読む」(本誌第51巻第2号 2000年7月)、「小説のなかに医療保険を読む」(本誌第51巻第3号 2000年9月)、「小説のなかにこれからの社会を展望する」(本誌第51巻第4号 2000年11月)、などを参照されたい。

の形成と変容』(同 1994年)が詳しく論じている。ここでは、河地重蔵「中国経済の今日までの歩み」(河地重蔵, 藤本昭, 上野秀夫『現代中国経済とアジア——市場化と国際化』同 1998年 第2章)の説明を示す——,

都市で工業化が進めば、都市の労働者に供給する食糧その他農産物の必要量が増大し、全国に配給する衣料、食用油、砂糖などを生産するための綿花、油料作物、製糖作物の必要量も増大する。これらの農産物の集荷は、個人経営農家を相手にしていたのでは確保できないから、農業経営の集団化と統制による強制的な義務供出制が必要となる。またこのような物的な面だけではなく、資金面でも集団化は有用にはたらく。安い価格で供出させることができれば、これを労働者に配給して、安い賃金で働かせることができるし、また安い価格の農産物を原料にして生産した衣料や食用油や砂糖を高い価格で販売すれば、国営工業の利潤は増え、その利潤はすべて国庫に上納されるから、国は工業化資金を一手に握ることができるのである。こうして農民は工業化のため耐乏を強いられ、集団化はそのための装置となった。

pp. 34~35

「農業経営の集団化」、つまり人民公社制度がすべて工業化の必要からの産物かどうかについて私は疑義がある——それについては少し後に言及する——が、事実としてこれによって「農民は工業化のため耐乏を強いられ」たのである。だから、畢飛宇「妹、小青<sup>シヤオチン</sup>を憶う」(『じゃがいも』所収)は、農村における困窮ぶりを描く——,

春になってからが農村では一番つらい時期だった。食べられるものはすべて食べ尽くしてしまい、これから成長していくはずのものはまだ育ちきっていない。大地は一面に緑で、一般にいう端境期とはちょうどこの時期のことである。暮らし向きがよくない者はしばしば近所の村に出向いて、物乞いをしたり、隙を見ては物をくすねたりした。

p. 227

また、遅子建「じゃがいも」<sup>5)</sup>(『じゃがいも』所収)も、まじめに働く三七歳の農民・泰山が血を吐いて医者にかかることを勧められつつも、「遅かれ早かれ死ぬんだから、金を病気の治療に使うのはごめんだね」(p. 15)と言わざるを得ないことを描く。もっとも、「夫婦は二人して夜が更けるまで話し合い、やっとハルビンに行くことに決めた。李愛傑[泰山の妻]は家にある五千元の蓄えをそっくり身につけ、さらに近所の人に粉萍[9歳の娘]と豚と何羽かの鶏の面倒を頼んだ。」(pp. 15~16)・「李愛傑はまず八百元の入院保証料を払い、それから街に出て、弁当箱、スプーン、コップ、タオル、スリッパ等の入院に必要な物を買った。泰山の病室は八人部屋」(p. 18)というのだが、「社会主義」下

5) なお、この「じゃがいも」という小説は、『現代中国女性文学傑作選』②(田畑佐知子・原善訳 鼎書房 2011年)にも収められている(同じ訳者=金子わこ氏による訳である)。

で病気の支払いなどカネの心配をしなければならないというのはあってはならない——「社会主義の理念」——と思っている私は、「家にある五千元の蓄え」・「八百元の入院保証料」がいかに農民にとって多大な負担かを考えてしまう。

農村生活についてさらに示せば、一九六九年の時点で、文化大革命による批判を受けて農村生活を送らざるを得なくなった、劉鴻運『アカシアの町に生まれ——劉鴻運自伝』（風濤社 2006年）が、当時の農村生活の厳しさを語っている——

農村では衣食も乏しく、苦労が多いし、賃金も稼げない。生活はかつがつその日暮らしで、交通も不便、病気になっても病院が無い。もし本当に病気になれば、はるか遠い大連市か、または比較的近い瓦房店に名前はわからないが病院はある。 pp. 141～142

また、彼は、一九七八年時点での都会の公民と農民の格差についても語る——

〔名誉回復されれば〕私の賃金収入は一月で農民の半年分の収入に匹敵する。これで農民がうらやましがらずにおれようか。 p. 147

ところで、少し前の私の疑義（「農業経営の集団化」、つまり人民公社制度がすべて工業化の必要からの産物かどうか）については、河地氏は同じ論文の少し後で次のように指摘する——「社会主義的改造の過程で、毛沢東は農業の合作社化（協同組合的集団化）を強行したが、それは急速な工業化にともなって増加する都市への食糧、工業原料の供給を確保し、かつ工業化資金を得るためであったと同時に、集団化は、社会主義的イデオロギーによれば、生産力を飛躍的に上昇させ、農民を豊かにするはずであった。たしかに集団化は、家族経営ではできなかった土地、労働力利用の合理化による一定の生産力効果はあった。しかし機械化をとまなわぬままアジア的労働集約農業を続けたばあい、集団的労働・経営はなじまない面が多く、低価格で強制供出させられる農民はいぜんとして貧しいままであった。農民闘争を率いてきた毛沢東の不満の一つはここにあった。またもう一つの不満は、社会主義によって『一五年でイギリスに追いつく』という野心から見れば、成長スピードはまだ遅いと感じられた点にあった。そして、その原因は、革命中のいきいきとした自主的行動に頼ることの多かった『農村作風』、『遊撃習気』<sup>ゲリラ</sup>が、ソ連流の『正規化』された政治制度、集権的計画経済体制が生み出した官僚主義によって失われたためだと考えるにいたった。／そこで毛沢東は、農村革命の伝統を再生させる中国的社会主義の立場からあえてソ連方式を批判し、もっと農業や軽工業を興せば、その方がかえって重工業と成長スピードを速めるのだ、もっと地方の企業や農民の自発的積極性を発揮させればそれが可能になるのだ、と説いた（一九五六年『十大関係を論ず』。）」（pp. 36～37）こうしてやがて文化大革命に至るのであるが、今はそれは措く。

『じゃがいも』においても、農村の貧しさという事態は変わらない。同書記者である金子わこ氏の「あとがき」によれば、「わたしの訳した作品の著者は、一九六〇年代生まれ

の作家が多く<sup>6)</sup>、彼らは文化大革命という政治的混乱の中で幼少期を過ごした。畢飛宇、葉弥は両親が下放され、農村で育った。遲子建、魯羊は両親と離れて、田舎の祖父母のもとで育てられた経験をもつ。農村での暮らしが、彼らの豊かな文学精神を育んだ肥沃な土壌であったのだろう。」(p. 316)そして、葉弥「ピンク色の夜」の「訳後記」では、「葉弥は……一九六四年蘇州生まれ。六歳のとき両親が『下放』させられ、貧しい農村で八年間子供時代を過ごす。」(p. 308)という。

この「下放」——学生・知識人が農民から学ぶため農村へ赴き、そこで働き生活する——というのもまた、文化大革命の一環である。中国では公式に否定されたとはいえ、文化大革命がいかに重いテーマであるかが分かる。

### 3. 「開革・開放」

さて、前節で見たように、都市に比べて農村は「過酷」である。だからといって、しかし、中国では、かつての日本の高度経済成長期のように農村から都市への人口大移動が起こらなかった。正確に言えば、政策的に制度として起こり得ないように枠づけされていたのである。これについて、大島一二「停滞する内陸農村と出稼ぎ」(加藤弘之編『中国の農村発展と市場化』世界思想社 1995年 第六章)が説明している——

中国では一九五〇年代から人口移動を抑止し、固定化する「戸口制度」が実施されてきた。この発端は、人民公社化に象徴される当時の農業集団化を嫌った農民が都市に流入するのを抑止するために実施され……これ以後、この戸口制度によって都市と農村は明確に隔離されることとなった。つまり、都市に戸籍をもたない農民が都市に無許可で移住することを阻止するため、おもに食糧、住宅、就業の三つの側面から制度の補強がなされ定着していった。その内容は、都市の正規の戸籍(非農業戸籍)をもたない農村戸籍者(「農業戸口者」)は都市において食糧の配給を保証する食糧切符の配分を受けられず、同様に住宅、就業の配分も受けられないというものであった。 pp. 175~176

戸籍の問題が中国においていかに大きいかについては、たとえば、『王安憶 小鮑壯・他 現代中国文学選集7』(徳間書店 1989年)の佐伯慶子「解説」が、「『文革』後の中国文学のありようととも、王安憶の文学の出発点を解き明かす」作品のひとつであるとして王安憶の短編小説『雨のささやき』について紹介するなかで「戸籍」についての描写を取り上げているところからも読み取れる——

『雨のささやき』は、結婚適齢期の娘 <sup>ウエンウエン</sup> 雯雯が、職場からの帰りにわざと最終のバスを見過ごすところから物語が始まる。前に、同じような雨の夜、終バスに乗り遅れてとぼとぼ歩いていた雯雯を、たまたま通りかかって、自転車のうしろに乗せて家の近くまで

6) 「星竹は唯一、五〇年代生まれの作家だ。」(p. 317)

送ってくれた未知の青年に、もしかしたらまた会えるかもしれないと淡い期待を抱いていたからである。あの夜、自転車からおろしてもらったあたりを、毎日ベランダから眺めるのもいつしか習慣になっていた。上司が紹介してくれた相手とのつき合いも、恋人ができたと言って断ってしまう。兄がからかい半分に「空のかなたから白い雲が舞いくんだり、海から赤い帆の船がやってきて、神秘的な王子様がおまえに手をさしのべてくれるかな……」しかし王子さまは戸籍がないから上海に上陸することもできないし、食糧切符も衣料切符もない。少しは現実を見なくてはね、雫雫」と注意しても、彼女は自分の夢にしがみつきたいで、その青年がふたたび姿を現す日をひたすら待つ。 p. 226

もっとも、文化大革命を否定した中国の「改革・開放」政策により、「従来配給によってしか入手できなかった食糧、住宅、就業のいずれもが市場で売買される対象となり、都市地域に戸籍をもたなくても入手可能となった」ために、「八〇年代後半から大規模な出稼ぎ現象が発生した。」(同上 p. 176)

だから、『神木』の作品のほとんどで、つまり、「ナイフを探せ」に登場する二人の少年たち(従兄同士)、「幻影のランタン」の両親、「葬送のメロディー」の父親、「あの子はどこの子」の父親、「街へ出る」の家族、そして「神木」で犠牲になる人たちが「出稼ぎ」人なのである。なんと、「あの子はどこの子」に登場する子どもたちの名前は、「開<sup>カイ</sup>放<sup>フアン</sup>」と「改<sup>カイ</sup>」である。

そして、『じゃがいも』に収録されている、畢飛宇「雲の上の暮らし」は都会で金持ちになった息子に老いた母親が引き取られるというストーリーであるが、これもまた「改革・開放」政策下の中国の変化を背景にしているし、さらには、東西「俺にはなぜ愛人がいないんだろう？」では市場経済下でカネに翻弄される幾組もの男女の姿が描かれている。

「ナイフを探せ」での殺人の発端がせっかく出稼ぎで稼いだカネを都会の美人局に巻き上げられるというのも、あるいは、「雲の上の暮らし」で描かれる高層マンションでの何不自由ない暮らしのなかに潜む老親の寂しさ——結局は息子の渡すカネを使って人から物を買うことで癒される——も、都市化の一面を描いていると言えよう。

もっとも、渡辺新一「解説」は、この出稼ぎが「改革・開放」政策の産物とはいっても根本的な戸籍制度による移動の禁止は変わらないだろうという——

広大な中国農村部に暮らす農民にとって、街に出ることは極めて大きな共通の願望である。そしてほとんどの農民はその願望を実現せず、生まれた村で生き、死んでいく。農村部と都市部の移動は簡単ではなく、農村戸籍の家に生まれた者は一生農村で暮らす

7) なお、炭鉱での犠牲といえは事故の多さである。山本恒人「工業化と中国社会主義の形成」(上原一慶編『現代中国の変革』前掲)は、「労働組合の独自の意義が否定され、共産党に従属することによって……たとえば石炭産業における七〇年代後半の労災死亡率は国際的にみても無残な状態に陥った」と言う(p. 94)。これは共産党独裁の問題という視点からの指摘であるが、事故の尋常ならざる多発については改革開放により一層ひどいものとなっているはずである。



ことになる。昨今のいわゆる都市への出稼ぎ農民の波「農民工」は、有史以来初めての経済発展にともない、廉価な労働力の必要性から生み出されたもので、基本的な実態はそう簡単には変わらないだろう。 p. 427

私は、いまの共産党一党支配のままの「改革・開放」政策からは農民の自由を保障するような戸籍制度の廃止はあり得ないだろうという渡辺氏の見解に同意する。なにせ社会主義の理念については共産党一党支配を揺るがしかねないという理由で棚上げしている中国共産党だから、農民の自由についてまともに対応することはない。

しかし、社会主義の理念を棚上げしているとはいえ少なくともそれを廃棄せずに掲げている共産党である限り、その矛盾は噴出さざるをえない。そのことがわかっているからこそ、「中国政府も段階的に戸籍区分を廃していく計画を打ち出し……農村戸籍と都市戸籍の区分を廃止した新たな戸籍制度が実験的に黒竜江省と河南省で始まった。2種類の戸籍を統一して、同等の公共サービスを提供する」（森若裕子「中国、黒竜江省と河南省で戸籍制度改革が始まる」『ビッグイシュー』日本版 2015年1月1日号）。しかし、その「改革」は「人口の流動化を促進することで産業構造の変化に対応する狙い」からのものでしなく、「出稼ぎ労働者も都市住民と同じ権利が得られるという期待が高まっているが<sup>8)</sup>、北京、上海などの大都会では流入人口の厳しい制限が続いている」のが現実である。ということは、当局の都合によつての「改革」なのであり、渡辺氏の推測どおり「基本的な実態はそう簡単には変わらないだろう」。

#### 4. 文化大革命

第2節で言及した文化大革命に関わったところを、『じゃがいも』のなかの作品から掲げてみる。文化大革命（文革）が重要なテーマであることを示しておきたいからである。

まずは、「遅子建は小説のモチーフとしてあまり政治的な題材を取り上げないが、この作品は文革を書いたもので興味を覚えた。文革初期のころのある初夏の一日、夕刻から夜更けまでを子供の目を通して描いている。」（金子わこ「訳後記」 p. 210）という、遅子建「花びらの晩ごはん」から――、

父は半月前から県城<sup>9)</sup>の食糧倉庫に積み卸し作業をしに行っていた。十キロ余りの山道を自転車で通っていたので父は、朝早く出て夜遅く帰ってきた。父は以前はわたしたちの町の学校の校長をしていた。工宣隊<sup>10)</sup>が学校に進駐し、生徒たちに労働ばかりさせ、

8) 「しかし、農村戸籍を持つ人は土地の権利などがなくなることを危惧している。黒竜江省は農地面積が広く、農地を貸して、都会で働いている人もいる。既得の権利は一旦失われるが、それに見合う権利が保障されると政府は強調している。」（森若・同上）

9) 訳注より：県の人民政府が置かれている町

10) 訳注より：毛沢東思想労働者宣伝隊の略。文化大革命当時、学校などの科学・文化部門に派遣され、指導工作を担っていた。

勉強させなかったことに不満で、工宣隊の隊長と喧嘩をしてしまった。その結果、県教育局に訴えられ、教育局は父の犯行的な言動を県委員会に報告した。父は辞職させられ、  
 県城の食糧倉庫で力仕事をさせられることになった。……

父の不運はわたしから見れば当然の成り行きだった。なぜなら、母が父よりも先にソ連修正主義のスパイというレッテルを貼られ、三角帽子をかぶせられ、街を引き回されていたからだ。  
 pp. 179~180

そしてもうひとつは、畢飛宇「妹、小<sup>シャオチン</sup>青を憶う」から――、

村人たちは、妹を「ばけもの」と呼ぶのと同じように、わたしのことは「馬の骨」ですませた。わたしたちがこの村にやってきて数か月しか経っていないのに、村人たちは家族全員にあだ名をつけてしまった。わたしの父は「眼鏡」、母は「アイヨーウェイ」と呼ばれた。母は揚州出身で、揚州の人はみな習慣的に喜怒哀楽を表すときに「アイヨーウェイ」というからだ。あだ名を聞けばわたしたち一家四人が四類分子<sup>11)</sup>であることがすぐにわかった。  
 pp. 215~216

その年の冬、村によその土地からまたたくさんの人がやってきた。彼らは学校の中に閉じこめられ、一日中運動場に車座になって、人が本を読んだり説教をしたりするのを聞いていた。夜には教室の明かりはいつも遅くまでももっていた。深夜人々が寝静まったころ、学校の方から厳しい叱責の声と絶望的なむせび泣きが漏れてくるのをわたしたちはよく耳にした。……老若男女を問わず同じような表情をしていて、ものの言い方や声の調子、立ち居振る舞いもみな同じだった。最も不思議だったことは、彼らが歩くときは、まるで夜行性の動物のように用心深くびくびくとして、神出鬼没であったことだ。  
 p. 223

なお、後者は何も説明はないので分かりにくいかもしれないが、ここに描かれているのは文化大革命によって拘束され思想教育をされている人たちの姿なのである。

このように、小説の中に文化大革命で人々が“革命の敵”として批判される場面が出てくる。というのも、「今日、日本において文革が過去の遺物と化した感があるのと対照的に、中国国内では文革はいまだ過去の遺物にも歴史にも化すには至っていない。文革は触れれば今も人々の熱い血がほとばしり出るほどの、敏感な、また様々な場面で私怨や私情をまじえた激しい対立感情を呼び起こす現在的問題であり続けている」（加々美光行『歴史のなかの中国文化大革命』（前掲 pp. 10~11）からである。だから、文化大革命についての理解が必要となる。それを私の課題として確認しておきたい。

11) 訳注より：文革中に反動派・地主・富農・悪質分子を指した。

## 5. それぞれの現場<sup>ステージ</sup>での仕事

私がこの書評の意義として、今日の日本の状況——「右旋回の時代」——のなかで少なくとも私がいま現場でなしうる一つの仕事であるとした（本稿1．参照）が、じつは、そうした作業が各所で行なわれていることに励まされてのことである。

たとえば、今日では『嫌韓本』や『嫌中本』と呼ばれる排外主義的な装いの本、あるいは偏狭なナショナリズム——村上春樹が言うところの『安酒の酔い』——に酔いしれた感じの『日本万歳本』が並んでいる」書店が『『何だかイヤな感じがする』場所になっている」、そんな「出版業界で起こっている『異常』に異議を唱えるのが出版業界の人間であることは、本来なら当然なはずです」という、「ヘイトスピーチと排外主義に加担しない出版関係者の会」編『NOヘイト！ 出版の製造者責任を考える』（ころから 2014年）も、現場からの仕事のひとつである。

本稿1．で紹介した星野智幸氏の一文を講義で紹介したら、それを最近のサザンオールスターズのおわび問題に絡めてレポートした学生がいた——「最近のニュースでは、サザンオールスターズといった国民的バンド歌手桑田さんがライブで安倍首相に批判的なジョークを発言したことが問題となりました。この失言によりネット上では桑田さんを中傷するコメントが多く書き込まれ、大規模なデモも行なわれました。この事件もナショナリズム信仰に関連性があり、『日本人』であることを武器に渴望したアイデンティティーを取り戻そう、同じ『日本人』である考えを共有できる者同士で反発しよう、といった愛国心という名の同調圧力を持った集団が集まりデモに至ったと考えます。」

NHKの紅白なんて見たこともないのでまったく知らなかった私は図書館で調べてみたら、毎日新聞2015年1月26日に「時流 底流 サザンおわび騒動」として取り上げられており、そのなかに、『ネットと愛国』の著者・安田浩一さんの話として次のようにあった——「目くじらを立てるほどのものではない。／サザンの言動が気に入らないからと、ネット上で『反日』などと書き込んだり、レッテルを貼ったりする行為が横行した。『反日』という記号をつけることで『敵』として認知し、追い込み、つぶすという回路ができていく。書き込みには明確な理由などなく、不安・不満を解消する娯楽のようなものだ。排外主義に通底するものがあるが、加担しているという意識もないまま広がっていく。／桑田さんと所属事務所がおわびをしてしまったのは残念だ。無難に済ませようとしたのかもしれないが、有名なグループが謝罪したことで『圧力には逆らえない』という誤ったメッセージを送ってしまった。嫌な風潮が広がりがねない。」

まさに、これは今の時代状況を反映した事件であるが、さらに関連して調べているうちに、平野悠「『ピースとハイライト』は時代を変えるのか——ネット上で賛否入り乱れるサザンオールスターズ」（『週刊金曜日』2015年1月23日号）に行き着いたが、まさに平野氏が次のように説くところが、現場<sup>ステージ</sup>の力の必要性に繋がる——

今回の紅白でのパフォーマンスがリベラル陣営の唯一の希望になってしまうような現実

の方が深刻なのだと思う。「ピースとハイライト」に喝采を送る一方で、サザンが百田尚樹原作の映画『永遠の0』に主題歌を提供したことを批判する人も多いが……桑田を反戦活動家か何かと勘違いしているのではないだろうか。……この曲を誉めている人達も、NHKの職員も、ミュージシャンも、会社員も、みんなそれぞれ自分のステージを持っているはずで、結局の所、自分の生きている領域で「ピースとハイライト」のような行動をとるしかないのではないか。「ピースとハイライト」が時代を変える曲になるかどうか？それは、私たちがどれだけこの楽曲を愛し、そして一人ひとりがこの先どう生きていくのかで決まる……この程度の事で深々と謝罪しなければならない日本の言論状況は、特定秘密保護法施行も含め、より深刻になっている。(傍点強調は池野)

そうなのだ。「結局の所、自分の生きている領域で」どう踏ん張り、「そして一人ひとりがこの先どう生きていくのかで決まる」のだ。

(本稿は、本学特別研究費の成果の一部である。)